

## 論文要旨

学位論文題目 河田嗣郎の男女平等思想とジェンダー

氏名 亀口 まか

本論文の目的は、明治末期から昭和戦前期にかけて活躍した経済学者・社会政策学者の河田嗣郎(1883-1942)の男女平等思想を考察し、その歴史的意義を明らかにすることである。

これまでの研究では、河田は近代日本における女性解放論の一典型を展開した人としてある程度注目されてきてはいるものの、いずれも年代や分野別の断片的な検討の域を出ていないことが指摘できる。本論文では、女性の政治的経済的自立と同時に、女性労働者に対する母性保護の必要性を主張した河田の性別概念に注目し、これまで十分に明らかにされてこなかった河田の生涯にわたる思想を検討した。具体的には、河田の著作活動全体から、家族制度、社会問題、社会政策などの多岐にわたる議論における性別認識の内実を考察した。なぜなら性別認識は、家族、教育、労働の問題それぞれの文脈の中で様々な構築されていくものであって、ひとつの男女平等思想の中で立ち現われる性別認識は決して一義的ではなく、その多様性への照射を意識した方法によって分析検討する必要があるからである。

本論文は、性別の社会構築性を視座とすることによって、女性解放の思想的類型と論争につきまとう対立軸である母性の重視か、それとも労働による自立かといった二項対立的な整理では捉えられない河田の男女平等思想の意義を明らかにした。

第1に、河田が性別を不変とみなすことを否定し、家族制度の解体を示唆する認識を示したことを指摘した。河田は家族制度を「生物学上の構造物」と表現し、男女の性的区別に拘泥する「没人格主義」の組織であると捉えたうえで、明治民法が規定する家父長制の家族制度だけでなく、新しい家族制度である「小家族」もまた「生物学上」の性別に立脚する制度である以上は、性別を不変とする理解は維持されると認識し、家族制度の解体をも示唆していたことが確認できた。

第2に、河田は家族制度における男女の権力関係を否定するなかで、現行の性別に関わる規範・法律を批判し、女性を政治・経済の主体として育成する新たな教育論を展開したことである。例えば、社会教育、学校教育における河田の公民教育論には、女性を権利主体として明確に位置づけたうえで、市場経済・生産労働を中心に社会を捉えるのではなく、消費経済を起点に社会を捉えることで、その担い手である女性を経済活動の主体者と位置づける教育的意図があった。このことは、河田が女性のありようを限定する性別特性論に陥らない視点に立っていたことを明らかにするものであった。

第3に、河田が新たな性別概念を提示したことである。まず明治末期における上杉慎吉との婦人問題論争からは、男女の人格の差異を自然として性別の序列化を肯定する上杉に対し、河田は人格的平等の観点から性別を自然とみなすことを否定し、男女同権を主張したことが明らかになった。そして大正期後半における平塚らいてうの河田に対する批判からは、両者における性別に対する意味づけの違いが浮

き彫りになった。すなわち男女の違いを強調する立場をとる平塚らいてうに対して、河田は性別を「天然的な区別」と「社会的な区別」に分けて捉えたうえで後者の社会的構築性を指摘し、その固定化と序列化を否定するという、今日のジェンダー概念の原点に位置づく新たな性別概念を提示したことが明らかになった。

第4に、河田の社会政策論における「社会部類」概念の発見である。晩年の河田は、社会生活における不平等はどのように正されていくべきなのか、そのための国家の役割は何かを考え、社会政策という新しい学問分野を切り開いていった。河田が社会政策の基礎概念に置いたのは、「階級」概念ではなく、性別や人種を含む社会構成概念としての「社会部類」概念であった。このことから、河田が、資本主義社会が生み出すのは資本家と労働者間の不平等だけではなく、性別間、人種間における不平等も生み出しているのであり、それらに対応することが社会政策には求められているということを明確に認識していたことが明らかになった。女性の経済的自立と母性保護をともに主張した河田の思想は、階級一元論を超えて女性の解放を主張していくという先駆的な挑戦であったと指摘した。

以上、河田の男女平等思想とその性別概念の分析を行った本論文の意義は、以下の2点である。第1は、性別の社会構築性を発見したこと、第2は、階級概念だけではなく、複層的に社会の差別の様態を分析する「社会部類」概念を提示したことである。河田の性別概念、社会部類概念は、今日の社会分析概念の嚆矢に位置づくものであった。その意味で河田の男女平等思想は、今日の「ジェンダー平等」の源流に位置づく画期的な思想であることを明らかにした。